

NPO法人



2012年12月10日
第16号

Jomon Shiba



特定非営利活動法人
縄文柴犬研究センター



Jomon Shiba

第16号

もくじ

犬たちと暮らして ☆JSRC 副理事長 橘 宏 2

シバの散歩道(16) ☆JSRC 理事 根深 誠(文筆家・釣り師・元登山家) 4

そらの出産報告 ☆JSRC 理事 一ノ澤義雄7

高校生との交流 報告 JSRC 柴犬研究所 五味8

お便りコーナー

☆北海道・橘喜代子さん10

☆埼玉県・山下さん ☆鹿児島県・古市さん ☆千葉県・大田原さん

☆京都府・長井さん ☆京都府・金さん11

☆カモシカと出会う ☆石川県・黒梅 明12

☆良子の近況 ☆富山県・竹内誠一14

☆新潟県・田中さん14

様々な日本犬との出会いを通して-2 ☆大分県・石井 勲 15

更新世(洪積世)の人類化石(一口メモ:G)16

新オオカミ伝説-三重県での出現記録 ☆荻原正夫(地方史研究家) 17

「縄文柴犬ノート」を読んで・・・のお便りから 19

事務所報告 ☆新入会 ☆会費 ☆御寄付 ☆犬舎登録 ☆小犬登録 ☆寄贈 20

出版企画について-中間報告 ☆五味靖嘉 20

募 集

2013年度分からの会誌・表紙用の写真を募集します。写真のサイズはA4版以上(デジタル・アナログ可)です。
 テーマは自由ですが、未発表の作品に限ります。不明な点は、表記まで問い合わせください。

・会費や寄附などをお寄せいただいた方の氏名・県名を掲載させていただきますが、匿名を希望される場合は、お知らせください。

特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センター

会事務所

郵便振替口座 02280-2-106951

〒 014-0073 秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5

TEL 0187-68-2976

<http://www.jomon-shiba.com/>

encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp

犬たちと暮らして

J S R C 副理事長 橋 宏 (北海道)

今、私の相手をしている縄文柴犬「竜太」と「未来」は、ともにずっと手許において飼育し続けたいと思っている犬たちです。

2000年の秋に「竜太」を、そして2003年には「未来」を、これは作出を考えてのことでした。

当時、我が家にはミックス犬の「ワサビ」が既に家犬として飼育されていた。この犬は、孫娘が友達の連れてきた3匹の中の黒毛の犬を飼いたいと決めたものの、結局、私達が何となく面倒をみることになり、本当は娘たちの家犬となるはずなのに、なぜか我が家に入り浸りとなった次第。

「未来」を千歳空港へ、「ワサビ」と「竜太」と共に迎えに行った。貨物係の人が、「元気のいい犬ですね」と。ずうっと啼き通してきたようであった。先住犬とはどうなるかと、思ったが、案ずるよりは・・・、という諺どおり、何のトラブルもなく落ち着いた。しかし、これは新米犬の啼き声に圧倒されての事だったらしい。

結局、皆、家犬となって、それぞれの居場所をそれぞれが探して、暮らす身となったようだ。

今年の6月始め、「ワサビ」の歩く様子がいつもと違うことに気がついた。以前、リードを急に振り切って走り出し、車と接触して右側の腰を打った後遺症か？と思っていたがそれも一因とせよ加齢による衰弱のようで、家の入り口の階段を登るのが無理、となった。朝夕の散歩には行きたいが・・・？という状況となり、その4～5日後に冷たくなっていた。

「竜太」と「未来」はその異変に気付き、一緒に散歩に行こうよ、と呼びかけるような啼き方をして、「ワサビ」の口元に噛みつこうと・・・「何だ、起きろ」とでも呼びかけてでもいるように。噛み付いては・・・と、引き離してみたが、2匹とも「ワサビ」の体のまわりを啼きながらぐるぐる回って散歩へと誘う。

それからはしばらくの日々は、「ワサビ」がいつも寝ていた場所へ行くので、「もう、いないよ」と、言ってやっと連れ出すことが続いた。

今はもう、納得しているようだが、散歩から帰ると「ワサビ」の亡くなっていた戸口へと行くことがある。

「竜太」を迎えるときに、この縄文柴犬は、野性的に逞しく育てたい！と思って、屋外に小屋を新築して期待していたのだが、寒いのに外ではかわいそう！ということで、「ワサビ」と同じように家犬となった。その後、「未来」が来て3匹それぞれが家の中で休む場所・寝る場所を決めている。この犬達と暮らす以前、いろいろと思い出す犬達がいたのだが、私が自分から望んだ犬は縄文柴犬の「竜太と未来」だけだ。

昔は犬を必ず繋留して飼育する、という事になっていなかったようだ。長女が歩き始めて近所へ出歩くようになった頃、生まれたばかりの仔犬を抱えて来て、「私の犬、貰ってきた。」と。それが犬との暮らしの始まり。

当時、家には既に猫の「トラ」が居たが、犬は外・猫は家の中という暮らしで、犬は半分野犬的で小屋の中にいる、ということは殆ど無く、食事時に呼ぶと、どこからともなく出てくるという具合、買い物や銭湯に行く時には後からついてくる。私達が出てくるまではその戸口で待っている、という暮らしだった。

そんな頃、最初の犬は、銭湯から出てくると姿が見えない。呼んでも現れずにそのままになったが、娘た



手前：先輩犬=ワサビ

右奥：竜太=天の柏王-天童犬舎・2000. 9. 4生

(東毛秋月×風神の紅)

左奥：未来=和の雪姫-どやくの宿・2003. 11. 22生

(彩の琥王×中仙菊姫)





ちは「あんなに可愛がっていたのに？」と…。それから暫くして、良く似た犬が歩いていたので呼んでみた。こちらを見て近寄って来たので、連れ帰ろうと首輪に手をかけようとしたら、身を翻して走り去ってそのままになった。犬が居なくなると、娘は淋しいのか新しい犬を連れ帰る。その犬の面倒は結局私が見ていくことになるのだが。

そんなことで、いつも私の家には犬がいた。それが息子に移っていったのか、処分されそうになった“レトリバー”や、最近は福島の、飼い主からはぐれてしまった犬を、どういう関係からか、飼うことになったとのこと。

連れ歩いても自慢？できるような犬を、と思っていた時に、新聞「赤旗」で縄文柴犬の広告を見て、思わず念願の日本犬を手にすることができると電話し、秋田へ、となった次第。

ところが今、江別でこの新聞「赤旗」が縁で、ずっと気になっていた人の息子さんを偲ぶ作品展を開催しています。12年前に同紙「この人」欄に出ていたのを思い出し、編集部にお問い合わせ尋ね当てたのです。そしてつい先日、東京都文京区にあったその作品を私の車で北海道江別市まで運び、展示しているのです。1990年の暮れに難病MS（多発性硬化症：編集）のため43才で他界した人です。この人の父と私は、新潟で教職に就いた1950年頃の知り合いです。その後、彼は東京で、私は北海道に流れ着いたのですが、どうなっているか？と、気になっていたのです。もう、60年後

の消息ということになる。その人の息子が小さいころの絵を見て、私は大変気になっていたのも、彼が難病のMSを患い、24時間介護の必要があるなど、手紙の返事や電話の対応が出来なくなって、どうしているのか？と、心配していたのです。実現不可能に思えたこの作品展開催の実施といい、縄文柴犬との出会いなど、私にとっては、「赤旗」が取り持つ不思議な縁です。2011.11.1ワンワンの日に



地元の北海道新聞にも紹介された話題の作品展

シバの散歩道 (16)

犬猫看板観光旅行記 その6

根深 誠

(文筆家・釣り師・元登山家)

武奈が岳から下山し、京都駅ビルの観光案内所で安いホテルを紹介してもらったついでに、京都市内で市民が気軽に散歩する場所をたずねた。

「そうですね、やっぱり京都御苑ですね」

「どうやって行くのでしょうか」

係員は笑顔を絶やさず、案内のパンフレットを差し出し、行き方を説明した。

駅前のホテルに宿泊した翌朝、案内のパンフレットを片手に地下鉄烏丸線で今出川に降車し、同志社大学の向い側にある今出川御門から入った。入ってすぐに、

ずいぶん利用者が多いのに驚いた。自転車に乗っている人、ジョギングしている人、バードウォッチングしている人、三脚を立てて、満開の枝垂桜を撮影している人、絵を描いている人、飼犬と散歩している人、ベンチに腰を下ろしている人。さまざまな利用者が多数いる。飼犬をつれた散歩者も、これまで見てきた町の中では一番多いのは、やはり大都市であり、しかも朝の時間帯だからだろうか。

「ワンチャンの写真を撮らせてください」

例によって、かくかくしかじかと弘前市役所の事例



京都御苑は開放的で何組もの飼主が散歩していた (以下同)



御苑の出入りに設置されてある犬猫看板

を持ち出し、私が旅行しているわけを一通り説明する。「弘前ね、昔、主人と行ったことがあるんですけどサクラきれいでしたよ。それから、あの山、なんて言いましたっけ、きれいな山ですね。しかし、弘前って、そんなところなんですか。犬と散歩していると心が和みますのね。地球というか、大地は人間だけのものではないですからね。フランスではね、公園の入口に、フンを持ち帰らせるためのナイロン袋が用意されてありましたよ。いくらなんでも、入るなはひどいですね」話し好きな婦人だった。

「お宅もワンチャンを飼ってるんですか。名前はなんですか」

「柴犬だからシバと呼んでいます。正式な犬号は、弘前公園の北門の向いの家で生まれたことから古城獅子号なんですけど」

「まあ、たいそう立派な名前なんですね。飼犬がいると家庭が明るくなりますよね」

京都御苑の飼犬をつれた散歩者は芝生に入って犬を遊ばせている。それでいてルールは守られているので

ある。公園入口の立看板の片隅に注意事項が記され、その項目の一つに「犬をつないで散歩してください。また、フンは持ち帰って下さい」とある。「さくのなかにはいらなくてください」という場所もあった。

弘前市役所の、まるで通せんぼでもするかのような権高な立て方ではなかった。弘前市役所の場合、犬猫の散歩者を眼の仇にしているようである。

それにしても京都御苑は、市民の開放的な場所として利用されているとの印象を強く受けた。さすが、わが国を代表する観光文化都市というべきか。

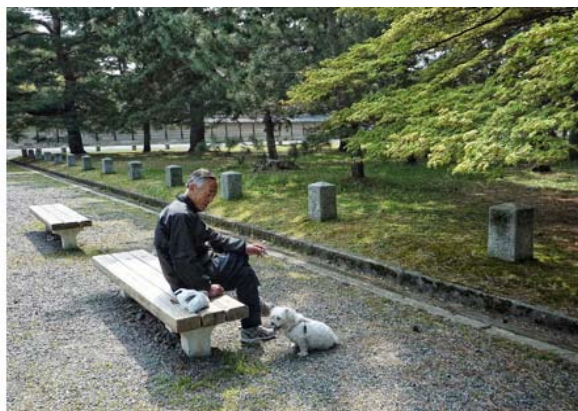
京都御所の宣秋門の前を通ったとき二人の門衛がいたのでたずねた。

「一般公開のとき犬猫などペットが入るのは禁止ですか」「オーケーですよ。ただし、嫌いな人もいますのでペットは抱いてもらっています。入るな、ではありません」
敏活な態度で、そう答えた。

私は溜飲の下がる思いがした。やはり、私の故郷の「犬猫入園禁止」の立看板は正気の沙汰とは言いがたい、と言わざるをえない。



京都御苑は開放的



京都御苑を出て、裏小路を徒歩で京都駅へ向かった。途中、ニヶ所に町内の公園というか、遊園地を通った。糞の不始末や放し飼いに対する注意事項はあったが「犬猫入園禁止」の看板はなかった。

京都から高速バスで東京に出た。

あくる日、JR京浜東北線・根岸線の石川町駅の南口から歩き出したとき小雨が降ってきた。大丸谷坂の途中、「山手イタリア山庭園」への上り口の階段の下に犬猫看板があった。リードに繋がれた飼犬の絵が描かれ、「犬は放さないでください／フンは飼主が必ず始末してください」と書かれてある。

私が写真を撮ろうとすると、乳母車を押して上ってきた婦人が立ち止まった。撮影の邪魔になると判断したのだろう。私は、どうぞ、どうぞ、と言って、先に行かせてから写真を撮った。急勾配の坂道なので、乳母車を押して上り下りするのも、とくに雨降りのときはたいへんだらうと思って婦人に話しかけると、そうですね、と肯いた。

歩きながら、怪しまれるといけないので事情を話すと、凄いですね、と婦人は驚いた。なにが凄いのだろう。犬猫看板を探索するという旅行の目的がいつぶう変わっているからだろうか。それとも執念を感じたのだろうか。この点について確認しそびれたのは、私の

話を聞いて、婦人が五所川原に住んでいたことがあると話したからだ。

私は驚いて思わず、話題から逸れ、五所川原の方ですかと訊いた。

しかし、そうではなかった。夫の勤務の関係で五所川原に住んでいたことがあったのだ。なんの仕事ですか、と訊いてから、我ながら詰まらないことを詮索するのは、いまの場合適切でないと反省した。金融関係ですと婦人は答えた。

話題を「犬猫入園禁止」の看板に戻すと、「このへんでは見たことないですね。たぶん、ないと思います」と話した。

「ないのが普通なんです」

山手本通りに出て婦人と別れ、港の見える丘公園に向かった。瀟洒な家屋が立ち並ぶ、高級住宅街の素敵な散策コースである。樹木が多い。これがわが故郷になると、落葉がゴミとして苦情の対象や近隣トラブルの原因になりかねない。四季折々、自然の息遣いに耳を澄まし、例えば凋落の秋、自らの人生を重ね合わせて来し方を振り返り、落葉に感謝の念を抱くような感慨はまったくないようだ。

港の見える丘公園に着くころ、雨が上がった。派出所のある入口から入って右手の看板に、これまでの犬猫看板にくらべて具体的に厳しい内容の文言が記されている。

「横浜市動物の愛護及び管理に関する条例」により犬の放し飼いや、犬の糞を放置することは禁止されています。また、これらの行為は、「横浜市公園条例」でも他人に迷惑となる行為として禁止されています。

違反者は罰金に処する、とのこと。ちなみに「犬の放し飼いや、犬の糞を放置することは禁止」、「他人

に迷惑となる行為として禁止」の部分は赤色の文字で記されて強調されている。つまり公園での犬の放し飼いや、犬の糞を放置することは、他人に迷惑がかかる行為として禁止する、ということなのである。

翻って、わが故郷の弘前市の場合だと、飼犬をつれて市道を通行するだけでも「管理に支障をきたすと思われる行為」と恣意的に解釈しているわけである。以前、わが家に五人がかりで私を封じ込めにきた市役所職員に「誰がそう思うのか」と問い質したところ、「私どもが」と答えていた。しかし、「私どもに」にそのような法的根拠もない権限がゆだねられているのだろうか。

飼犬をつれた散歩者がフンの始末をしないかもしれないという予断を根拠に、「公」の市道の通行を禁止させるという弘前市役所の担当者責任者は、一方では、ゴルフの打球がネットを飛び越えてくる危険については放免している。

港の見える丘公園から山下公園に下り、横浜赤レンガ倉庫のレストランで昼食をとった。途中、飼犬をつれた散歩者を何組か見かけた。「犬猫入園禁止」の看板はもちろんなかった。

昼食をとりながら、今回の旅行について考えた。行く先々で繰り返し思い知らされるのは、犬猫看板に見られる、弘前という地域社会の異常性についてである。それを指摘したところで行政は改善しようとはしないのだから、低所得者の私が身銭を切って旅行し、自らの正当性を確認したところでなほほどのことでもない。この先、いくら犬猫看板の探索旅行を続けても切りがないのである。

そして、いくら抗議し苦言を呈しようとも、相手は高飛車な態度でのうのうと構えている。

諸料金一覧

会費	・ 入会金	1,000円
	・ 年会費	5,000円
登録料	・ 血統書発行 一頭	1,500円
	・ 犬舎名	2,000円
	・ 登録再発行 一頭	1,000円
	・ 単独犬	2,000円

血統登録について

- ①. 仔犬が生まれた方は御一報下さい。(用紙送付)
- ②. 申し込みには登録料が必要です。
- ③. 血統登録、犬舎名登録は五文字以内で、漢字には必ずふりがなを付けること。
- ④. 両親犬のカラー写真(5×6cm以上)を添付。
- ⑤. 二週間以内に、カラー印刷で発行しております。